**マレーシア出身ハムザさんの「防災ワークショップ」に参加しました**

12月18日（月）、本校で行われたマレーシア出身のHAMUZA SAUFIさんによる「防災ワークショップ」に、語学研究部員8名と、災害科学科5名が参加しました。ハムザさんはマレーシアで、人命救助の免許を持ち、マレーシアサラワク州でボランティア活動に日々専念している方です。このワークショップは「ともだち・カワン・コミュニティ」のサポートをいただき行われました。

まず、国や言語の説明があり、生徒たちは自己紹介をマレー語で挑戦しました。その後、負傷者の救助の仕方を、腕を負傷したとき、脚を負傷したとき、意識が無い時に分けて、救助体験を行いました。その中で、日本では救助の際には赤十字マーク（レッドクロス）を使用するが、イスラム教国では赤十字ではなく赤新月（レッドクレセント）が使用されていること、イスラム教徒は男性が女性に触れることはできないが、救助のような緊急事態では特別であること等、国や宗教によっての違いも実際感じることができたワークショップとなりました。

【生徒の感想】

今回のマレーシア交流を通して学んだことは二つありました。まず一つ目は何も使わずに救助する方法です。緊急時何も持っていないことが多いと考えられるため、救助者の腕を上手く使うことで人を運べると言うことに驚きと共に学びとなった気がしました。二つ目はマレーシアの挨拶です。「私の名前は○○」というのは「サヤ○○」で話すことができましたが「こんにちは」は更に自分で調べてみたところ、時間によって言い方が違うそうで昼はスラマットゥンガハリ、14時頃はスラマップタン、という違いがあることに驚きました。このように学んだ事を更に深掘りすることでより印象深い活動となり、且つ他国への興味もより増したように感じました。また、救助体験においてもなかなか聞けないことを聞けたので、災害に力をいれている学校としてより何かに生かせそうな気がしました。

（語学研究部2年　阿部寛輝）

実際に様々な体験をしたり、お話を聞いたりしたことで、今までわからなかったことを知ることができ良い機会だったと思う。私は妊婦役を体験したが、運ばれる側も多少の体幹が必要だな、と思った。国は異なっても、応急処置の仕方は一緒＝どこにいてもその方法を知っていればいざというときに役に立つ、ということがわかった。また、他国の方とのコミュニケーションをとるためにも英語の勉強をもっとがんばろうと思った。救助としては、自分より大きな人を運ぶときや、自分1人しかいないときに運ぶ方法があれば知りたいと思った。

（災害科学科1年　中島日和）

【ワークショップの様子】





